

# 月刊イラスト

【連載】

フィッツロビンと  
光の絵筆 episode3

竹見名央

イラスト えりな

ただ、描きたがっただけなのに。

レストラン・グラフィティ

scene3 民原と桐江

Q イラスト 篠屋

〈端っこをちょっと留っただけだよ〉

〈食べかけなんかいらない!〉

【企画】

新入生にインタビューしてみた。

【読切短編】

## 水槽

ひかり

イラスト 不思議

第5刊  
2014.  
04/25 発行

「じゃあ、わたしと友達になって」  
誰かが舌打ちをした。  
わたしはそれを、ただ遠くから見ていた。  
くるまれたメダカは、もう死んでいるだろう、  
死んでいて欲しい、と思った。



## 巻頭カラー

---

レストラン・グラフィティ scene3 氏原と桐江

Q/イラスト 篠屋





---

水槽

ひかり / イラスト 不思議



## エトランゼとは 第2回

---

ケミーと文芸島ちゃんが毎回「エトランゼとは」について考えるコーナーです。



まさか第2回があるとは.....



ページの穴埋めって大変だよね（中綴じ本だと4の倍数にしくちゃいけないし）



ところで今回も「エトランゼとは」なんですか？ ぶっちゃけ、もう語り尽くされてしまった感が.....



やだケミー君、エトランゼのエの字も理解していない君がそれを言うの？



煽られてるんですか僕



「エトランゼ」はフランス語で「旅人」「放浪者」「孤独」「うえーい」



ちょっと飛躍が過ぎるかなー



このご時世に、文芸島なんかにはきちゃう人間がまっとうだなんてとてもじゃないけど思えない n



誌面上での言葉選びは大切だと思いますよ御嬢さん



ちょっとー、名前で呼んでよー



だってー、名前ないじゃんー



ホビケンに文鳥って呼ばれてるよ



えっと...深刻な説明不足ですよ文鳥さん...



説明しよう！ ホビケンというのはホビ県の擬人化であり  
ホビ研とは一切関係ない架空の存在で黄色髪のカードいっぱい持ってる人です。



じゃあ文鳥さんって呼びますね(もういいや



ところで、最近のライトノベルでおすすめの作品ってある？



ごめんなさい僕ラノベ読まないです



えっ？



えっ？



じゃあさじゃあさ、ケミーの好きな作家さん教えてよ



うーん、一概には答えられなくて...



ちょっとさあ、ちゃんと答える気あんの？



え、ちょ、あれ



ていうか、エトランゼってラノベ雑誌じゃないらしいってきいたんだけど、一体どうなってんのよ？



そこは怒らないんですね



イラストをつけて売り出すっていう方法がラノベっぽいからって「日芸初のライトノベル誌、  
発刊」なんて銘打っていいと思ってるわけ？ ラノベだからって侮るなって、シラバスにも書いて  
あったじゃない。印刷費だってばかにならないのに、そんな甘ったれた根性で誌面うめていい  
と思ってるわけ？え？



それは……僕に言われても困るっていうか……



もうね、私この雑誌には文句つけたいところが沢山あるのよ。  
前回の表紙とかなんなの！？ ツイッターで流れてくる釣り画像じゃないんだから！



文鳥さんツイッターやってるんですか



教えないよ？



すいません



とにかくね、やるんだったら本気でやりなさい、と



本気かどうかは分からないけれど、睡眠時間削ったり授業休んだり  
鬼畜め切を押し付けたり、ブラック企業はいけないと思いますよ



でも赤字なんでしょ？



ちょ！



KMITとは！



KMITとは！



振り仮名がないと「けみっと」って読めない！



ちょ！



ていうか新入生と仲良くなりたい～！ きゃ～！



そろそろ紙面が埋まりますねw 一安心w



カラーページの無駄遣い～！ きゃ～！



で、ではこの辺で！ またね！

～今回のまとめ～

ケミー→KMITマスコットキャラクターの擬人化

文鳥さん→文芸島の擬人化

ホビケン→キャラ愛のみ。設定不足。

※煽り：本心を口に出さず相手を問いただすこと。皮肉と類義的にとらえら

れる場合もある。

※うえーい：大学生がよく使う感嘆詞。「もののあはれ」の精神に通ずる

ところがある。

※釣り画像：相手に誤解させて画像をみせること。マーケティングに使うと

違反。ツイッターのような無料ネットコンテンツだからこそ

許されるファンキーな娯楽。

※ブラック企業：一般的な人間のキャパシティを超えるものを要求する

行為の総称。

月刊エトランゼの未来やいかに！？

次回に続く！

### 新入生にインタビューしてみた

回答をランキング形式でまとめてみました

#### Q1 文芸を志望した理由は？

1位 文章を書くのが好き

2位 本を読むのが好き

3位 あとがなかったから

こちらは回答数順のランキング。

1位、2位は非常に文芸らしい回答ですね。

本を読むのが好きでも小説は書いたことがない、という人が多かったのが印象的でした。あとがないのは皆一緒です。がんばりましょう。

#### Q2 好きな作家は？

1位 森見登美彦

2位 村上春樹

3位 夏目漱石 / 太宰治

同じく回答数順のランキング。

最近人気の森見登美彦が1位。有頂天家族はアニメも面白かったですね。文芸学科生に嫌われている印象がある村上春樹も意外な人気を見せました。

文章構成のテクニックなどに惹かれている人が多かったようです。

3位には日本の近代作家達がランクイン。太宰はともかく、夏目漱石はちょっと意外でしたね。

ランク外では米作家や装丁に凝る作家の名前も挙がりました。

全体的には「この作家の作品には共感出来るから好き」という人が多かったです。

#### Q3 嫌いな作家は？

## 1位 村上春樹

2位 カゲプロの人

3位 鎌池 和馬

(ビッグタイトルのラノベ作家)

こちらは票数が割れたので印象に残った順にランク付けをしました。

多くのファンを獲得している作家が嫌い、という人はやはり多いようですね。

特に村上春樹は好きな作家、嫌いな作家の両方に名前が挙がっていました。

流石の影響力とでもいいでしょうか。

中には「読んでないけれど嫌い」という人までいました。すごいですね！

### Q4 小説とは？

## 1位 人に感動を与えるもの

2位 生きる意味

3位 人生の縮図

こちらも回答数順のランキング。

共感や感動など、読者視点の回答が多い中、生きる意味や人生の縮図など、創作者らしい鋭い意見もいくつか見受けられました。

「文芸こそ芸術の至上である」という過激な意見から

「納豆オムレツ」など意味不明な回答まで様々でした。個性的で面白い回答が多かったです。



# 水槽



ひかり

イラスト 不思議

## 本編(1)

生き物が苦手なわたしが、飼育委員になった。

わたしは、給食の時間に校内放送で好きな音楽がかけられる放送委員になりたかったが、放送委員を希望する人が多かったためにじゃんけんで決めることになり、あっさり負けた。わたしが「三回勝負にしようよ」と言うと「ちいせえ魚の世話じゃなか」とか「別に豚の世話しろって言ってるわけじゃないんだからさー」と言われた。だったらお前らがやれやと思いつつも負けは負け。これ以上不平を言ってもどうしようもないのでわたしは渋々飼育委員を引き受けた。教室で飼っているメダカの世話が主で、月に何度か下級生の仕事であるウサギの世話を手伝うのが飼育委員の仕事だ。メダカの水槽掃除も憂鬱だがそれよりもウサギの世話の方がもっと気が重い。特に雨上がりのウサギ小屋はなんともいえない匂いを放っていて近づきたくない。黒板の「飼育委員」の文字の隣には書記係の下手くそな字で大野、とわたしの名前が書いてある。溜息。小学生最後の一年で飼育委員になるなんて。念願叶って放送委員になれた女子に、机の下で中指を立てているとわたしの名前の隣にもう一人、別の名前が書き加えられた。助かった！ 押し付けよう！ と喜びのも束の間。それは最近学校に来たり来なかったりと気まぐれな登校をしている中島だった。この場の中島がいないのをいいことに誰もやりたがらない飼育委員にさせたのだ。さいてー。

木曜日の放課後、結局わたしは一人で水槽の掃除をした。

中の水をこぼさないように気を付けながら、水槽を水道まで運ぶ。水槽の中ですいすいと泳ぎ回る五匹のメダカを上から見下ろすと、メダカの、身体の中身が透けて見えて生々しくて正直気持ち悪い。今からこれらをポリ袋に移しかえ、メダカのエサの食べかすやフンで濁った水槽をわたしひとりで、しかも素手で洗うと思うとゾッとする。

右手に持ったコップで水と一緒にメダカをすくい、左手に持ったポリ袋に移動させる。水に混ざったエサの臭いが鼻先をかすめて眉間に皺が寄る。なるべく早く終わりにして帰りたいのでとりあえず水槽の水を捨て、新しい水を入れて終了。水槽を洗うなんて無理。一刻も早く手を洗おうと蛇口を捻ろうとした時、水道にメダカが一匹打ち上げられているのに気づいてわたしは小さく悲鳴を上げた。水槽からポリ袋に移動させる時にうっかり逃がしてしまったのだろうか。メダカは、丸い口をぱくぱくさせ、小さい身体を跳ねさせて苦しんでいる。恐る恐る顔を近づけて見てみると、目はガラス玉がはめ込まれたようで、どこを見ているのか分からない。わたしは少しの間、苦しがるメダカをじっと見ていた。はっと我に返った時にはメダカは虫の息。まだ生きていいのか確かめたいが触るのは怖い。胸の内側をドンドンと叩かれるように心臓が暴れ始める。どうしようどうしようどうしよう。このメダカ死んじゃうかも。いや絶対死ぬ。ていうかももう死んでるかも。このまま知らないフリをしてこの瀕死のメダカを水槽に戻してしまおうか。それとも水道に流してしまおうか。でも、明日になって誰かがメダカが一匹いなくなっていることに気づいたら……。教室の壁には、「メダカのすいそう掃除表」が貼られているので、木曜日に水槽の掃除が行われていることはみんな知っている。みんなはまずわたしを疑うだろう。どうしよう。

その時誰かが水道の方へ走ってくる足音と、ランドセルについた鈴が鳴る音がした。隣のクラスの子がまだ教室に残っていたのだ。

わたしはあたりを見回し咄嗟にスカートのポケットに手を突っ込んで、ポケットティッシュの中身をおろだけ全部取り出して瀕死のメダカをくるみ、トイレまで駆けた。

――捨てちゃおう。

トイレは電気が点いていないのに、個室がひとつだけ閉まっていて薄気味悪いがそんなことにかまっている暇はない。わたしが頭の中で何度もごめんなさいと繰り返しメダカをゴミ箱に捨てようとした時、閉まっていた個室が開いた。

「うわっ！ 中島さん！まだ学校にいたの？」

中から出てきたのは例の登校拒否気味の中島で、わたしはぎょっとしたが口元の筋肉を引きつらせながらも必死に笑顔を作り、彼女とはろくに口も利いたことがないのに、妙に馴れ馴れしく話しかける。薄暗いトイレで見る中島は、青白い顔に長い髪がかかっているトイレの花子さんばりに不気味。

「休んでた時のプリントとか、先生に貰ってて、それで……」

中島はもごもごと語尾を濁しながら、最後までちゃんと言いつけない。

「大野さんは……あっ水槽……」

「それならもう終わるからいいよ、大丈夫。わたしがやったから、大丈夫だよ」

彼女がわたしの名前を憶えていたことと、自分が飼育委員になったと知っていたことに驚きながらもわたしは必死に平常心を保とうとする。

「そっか、ごめんね、来週はわたしも一緒に……」

中島の言葉を遮って、わたしが「じゃあね」と言って水道まで戻ろうとした時、彼女はわたしを引きとめた。

「ねえ、そのティッシュなに？ さっきから水滴が落ちてるけど」

わたしはぎくりとして咄嗟にティッシュを持った手を身体の後ろに隠した。

「えっ、別に！」

わたしはティッシュをトイレのゴミ箱に捨て、濡れた手をスカートにこすりつけた。くるまれたメダカは、もう死んでいるだろう、死んでいて欲しい、と思った。

水道に戻るとわたしは急いで他の四匹が泳ぎ回る水槽を教室のロッカーの上に戻した。誰もいない教室は薄暗くて、窓から見える空は不気味な色をしていて、雲も出てきてきっと夕立が来る。わたしはランドセルを背負うと急いで教室を出た。玄関を出るまで誰にも会いたくない。早足は自然と駆け足に変わり、転がるように階段を駆け降り、そのまま全速力で帰宅した。

中島はわたしがしたことを見抜いているような気がする。彼女はわたしがトイレを立ち去った後、捨てたティッシュをゴミ箱から漁り出して中身を見はしなかっただろうか。まさかそんな悪趣味なことはしないだろう、そうであってくれと願いながらも、わたしの頭の中は水道に打ち上げられて苦しがるメダカと中島のことについていばいだった。メダカを捨てずに水槽に戻せばよかったとか、トイレに流してしまえばよかったとか、今となってはどうしようもないことを悔いた。そもそもなんでわたしが飼育委員やらなきゃいけないのか、どうして中島は学校に居たにも関わらず掃除を手伝ってくれなかったのかという怒りすら覚え、夕ご飯の味すら分からないほどだった。リビングの兄に「兄ちゃん、メダカって共食いするかな」と訊いてみたが「知らーん」と言ってゲームに夢中でまったく使えない。学校で行くのがこんなにも憂鬱なのは初めてだった。

次の日、わたしはいつも通り登校し何食わぬ顔で机に座り授業を受け、休み時間になれば仲良しグループの優香とお喋りをしていたが内心、誰かが消えたメダカに気づきはしないかとひやひやしていた。しかし誰も気づかないどころかメダカの水槽に近づいて彼らの泳ぎを見る者もない。わたしは安堵しながらも、昨日のわたしの苦労を思い出すとむかつく。

そして中島。わたしのしたことを知っているかもしれない、いや絶対知っている。来たり来なかつたり気まぐれ登校をしているくせにどうして今日に限って来ているの。わたしはメダカの水槽と中島の丸まった背中を交互に、横目で監視していた。しかし落ち着いて考えて見れば、教室で誰とも話さず机を見つめている中島が「ねえねえ聞いて！ 大野さんが昨日メダカ殺したんだよ」なんて誰かに言うことはまずないだろう。別にびびる必要ないじゃん、と無理矢理自分を安心させようと言いつ聞かせるが、不安は拭えない。その時ロッカーの方で「あああああああ」という叫び声が聞こえて振り返ると、教室の後ろでふざけ合っていた男子がメダカの水槽の中に消しゴムを落として騒いでいる。なんてことをしてくれたんだ。それを面白がったみんなも水槽の周りに集まり出して「きったねえなー早く取れよー」「手え突っ込むのやだよー」「俺の消しゴムもう使えねーじゃん、最悪」などと言って水槽を覗き込んでいる。もういいじゃん消しゴムなんて。諦めて新しいの買えばいいじゃん。早く水槽から離れて。お願い、気付かないで。

「あれ？ メダカ四匹しかいなくね？」

気付かれた。わたしは目をきょろきょろ動かし、二つに結んだ髪の毛先をしきりに指先に巻き付ける。逃げ出してしまいたいけど足はしっかりと床にくっついていて動こうとしない。

「もともと五匹いたよね？」

「えっ、うそー？」

「隠れてんのかな」

「大野、昨日水槽の掃除したー？」

消しゴムを投げていた男子の一人に訊かれてもわたしは何も言えずに立っていることしかできない。自分に向けられ

たみんなの視線が、身体に絡みついてくる。優香が「ねえ、大丈夫？」とわたしの肩に触れたのが分かった。正直に謝ろうとする一方で、必死に逃げ道を探している。どうにかして、自分を守りたい。

「中島さん」

わたしは咄嗟に中島の背中に呼びかけた。中島は丸めた背中をぴくりと小さく動かし、ゆっくりと振り返ってわたしを見る。目が合うと、中島はわたしの心を見透かしたかのように、視線の意図の呑み込んだように、わずかに目を見開いた。わたしは半ば睨むようにして、唇を噛んで中島から目を離さなでいると、中島は椅子から立ち上がって伏し目がちに口を開いた。

「わたしが逃がしました。水槽を掃除してて……」

誰もが耳を疑い教室はしんと静まり返る。口の中が乾いてくるのが分かる。誰かが「まじで」と呟くとみんなもひそひそ何かを言い合いましたがわたしは中島を凝視し続ける。授業開始ベルが鳴り、みんなが席に着き始める。結局誰も中島を責めず、落ちた消しゴムは水槽内のオブジェとなり、メダカ騒動は治まったが、わたしの動悸はなかなかおさまらなかつた。

わたしはその夜、自分を守るために咄嗟に中島に罪をなすりつけたことを悔い、そして、自分の罪をクラスメイトにバラされることを恐れた。わたしは学級の名簿から中島の家電話番号を調べ、リビングから電話を自室に持ち出し中島の家にかけて。中島の親が出たら何と言おうかとどきどきしたが幸い電話に出たのは中島本人で、わたしが名乗るとほんの少し黙ってから「なに？」と素っ気なく答えたので、わたしも「メダカのことごめん」と簡潔に言う。

「別に。気にしてない」

気にしていないわけがない。わたしは何と答えていいかわからず、これ以上電話を続けるのも苦しくなり「お願い、メダカのことみんなには黙ってて」と早口で言った。なんて卑怯なことを言っているんだろうと思いつつも、結局は自分が可愛い。謝るためだけでなく、口止めするために電話を掛けたことを、中島は気づいているだろうか。電話越しに、彼女の微かな息づかいを感じる。

「じゃあ、わたしと友達になって」

少しの沈黙の後、中島は静かな声で言った。どういうこと？ 突拍子もない中島のお願いに驚いたが、中島への後ろめたさで押しつぶされそうになっていたし、メダカ殺しの真犯人は大野でさらに登校拒否児中島さんに濡れ衣を着せた！なんて言われたらたまらないのでわたしは頭の整理がつかないまま「わかった。いいよ」と答える。「じゃあ今度からは携帯にかけて」と言って携帯電話の番号を教えてくれた。わたしは携帯電話を持っていなかったので自宅の番号を教え、電話を切った。

それからわたしは放課後になると中島と水槽の掃除をしたりメダカの泳ぎを観察したり、一緒に宿題をやったりした。わたしは物語を読んだり漢字を覚えたりする国語がきらいで、漢字の書き取りの宿題が出された時は本当に気が滅入ったが、中島はさらさらと漢字を書いてさくっと宿題を終わらせてしまう。国語は中島の得意科目であるらしく、テストでも良い点数を取っているらしい。わたしがのんびりと鉛筆を動かしている間、中島は暇を持て余している。

「つ、き、つ、く、な」

国語の教科書を開いて漢字の書き取りをしていると、中島が突然意味の分からないことを言い出した。

「え？ 何？」

「文の先頭の文字だけ拾って読んでるの。か、お、そ、な。あ、漢字が混ざると変になっちゃうね」

中島は丸い爪が乗った指で文の先頭をなぞって読んでいる。わたしが「ねえ、それ楽しいの？」と訊くと、中島は「うん」と頷いて笑ってその遊びを続けた。





## 本編(2)

教科書の横読みに飽きると、水槽を指先でつついて「ほら見て、水草についでるノロを食べてるよ。ふふふ」とか楽しそうにメダカの観察を始めた。しかし、わたしにはそれらの面白みはまったく理解できず「うん」とか「ああ、そうだね」とか気のない返事を繰り返すだけだった。

中島と話すのは、みんなが下校した後の教室で、普段はいつも通り、仲良しグループの中で過ごした。

「中島さん、どうして教室に来ない時があるの？」

放課後に中島と机を向き合わせて宿題をしている時、わたしは中島にできるだけ自然に訊いてみたことがある。単なる好奇心と、意地悪が混ざり合ったような気持ちでわたしは彼女に尋ねた。わたしは中島と過ごす放課後に嫌気がさしてきていた。宿題なら、家に帰ってテレビを見ながらやればいいし、メダカの水槽掃除は週に一回やればいい。ましてや観察なんてしなくてもよいのだ。そんな不満が、わたしに意地悪なことを言わせた。

彼女は鉛筆の動きを止め、少しだけ顔を上げ、上目遣いでわたしを見た。その表情が、睨んでいるようにも感じられて、わたしは少し怯む。

「みんながわたしのことバカにしてるから」

「みんなって？」

「クラスみんな」

中島は、自分がクラスみんなから疎まれていることを知っていた。だから「そんなことないよ」なんて嘘の慰めの言葉をかけることはできなかった。わたしが口ごもっていると中島は「大野さんには分かんないよ」と吐き捨てるように、低い声で言った。長く伸びた前髪から覗く切れ長な目が、やけに鋭く光っていた。

わたし自身、中島をバカにしているところがあったのだと思う。メダカを殺してしまったことを中島のせいにして、彼女をみんなの輪に入れずにこうやってこそこそ交流したりしているのがその証拠だ。わたしは中島と一緒にいるところを、他のクラスメイト達に見られたくなかった。中島と仲良しだと思われるのが嫌だった。

中島は時々わたしを家に招こうとしたが、中島と楽しく遊ぶ自分を想像できなかったし、理解不能な中島の家に行くは気味が悪く、毎回その場しのぎの理由をつけて断った。特別話すこともなかったのだから、教えられた中島の携帯電話の番号にも電話をかけなかった。中島は、あの日トイレで受けた陰気くさい印象とは少し違ってよく話す子であったが、自分の世界に浸っているところがあり、少し不気味だ。中島とわたしの関係は、わたしの中の、中島への後ろめたさや弱みを握られていることへの恐怖が繋いでいて、「友情」とは違っていった。

中島はもともと目立たない存在でみんなの足をひっぱってしまうことが多く、クラスでも疎まれることが多かった。給食当番での配膳にもたついた挙句、派手に食缶をひっくり返したりする。遠足の班を作る時に、自分からみんなの輪に入れず、先生やクラスメイトを煩わせる。クラスが二チームに分かれてどちらのチームが多く跳べるかを競った時も、中島が引っ掛かってしまったせいで負けてしまった。バスケやサッカーも苦手で失敗ばかりしてしまう。みんなはだんだん中島にはパスを回さなくなり、中島はコート隅で永遠にこないパスを待ったり、ボールを追う集団に健気に走ってついていったりすることしかできない。そんな中島を見てクラスメイトたちは「かわいそー」と哀れんだり「中島さんがチームにいると負ける」と本人に聞こえる声で言ったりした。「中島さんてトーコーキョヒなんだよー」と覚えてたの言葉で陰口を言う女子もいた。

中島は移動教室の時、わたしと優香のあとを一定の距離を取ってついてくるようになった。

「ねえ、中島さん、さっきからあたしたちについてきてない？」

横目で中島の姿を確認しながら優香が小声で訝しげに言う。

「そう？ 気のせいじゃないの？」

わたしは知らないフリをするが、明らかに中島はわたしたちと行動をともにしようとしている。わたしはそのたびに「もっと早く歩こう」と優香を急かし、中島を拒絶した。

卒業の時期が近づくとつれて、中島との交流は減っていった。中島は相変わらず学校に来たり来なかったりを繰り返していたが、登校した日には欠かさず掃除をしているのが、水槽内の澄んだ水から見て取れた。その頃には、消えた一匹のメダカのことなどクラスの誰もが忘れていて、わたしは水槽掃除を中島に押し付けるようになった。中島に後ろめたさを感じながらも、彼女の責任感を利用し続けた。

ある時、給食の配膳をしていた中島がつまずいて食缶をひっくり返し、カレーを床にぶちまけた。「あーあ」「またかよ」と男子が言った。中島はどうしたらよいかわからないのか、助けを求めるようにおろおろと周りを見渡している。先生が「雑巾持ってきて！ みんなで協力して」というとそばにいた三、四人の女子が清掃用具入れから雑巾を持ってきて、床を拭き始めた。中島も、顔を真っ赤にして、今にも泣きそうな顔で床を這うようにカレーを拭いた。

誰かが舌打ちをした。

わたしはそれを、ただ遠くから見ていた。

中島は、わたしがランドセルに教科書やノートを突っ込んで帰ろうとすると、何か言いたげにじっとこちらを見つめていることがあった。背中に感じる中島の視線に、わたしは気づいていないふりをし続けた。

卒業式に、中島の姿はなかった。

六年が経ち、わたしは大学進学により親元を離れることになった。引っ越し先のアパートに運ぶ荷物と実家に置いていくものを整理していると、茶色の表紙の、分厚い本が出てきた。小学校の卒業アルバムだった。何気なく開くと、かつてのクラスメイトが無邪気に笑っている。わたしはあまり、昔の思い出を憶えているたちではない。今では名前も思い出せない人もいる。アルバムの後半は文集になっていて、それぞれが小学校での思い出や将来の夢について書いている。ろくに読まずにクローゼットの中にしまい込んでいたので自分が何を書いたのか忘れていたが、わたしは「修学旅行の思い出」という題で作文を書いていた。

ぱらぱらとページをめくっていくと、ふと〈中島有里子〉の名前を見つけた。中島。小学六年生の時、放課後だけ友達のようなことをした女の子。今思うと不思議な関係だった。わたしの記憶の中で、彼女の顔はぼんやりと霞んでいてはっきりとは思い出せない。中島とわたしはそれぞれ違う中学に入学した。それからお互い連絡を取り合うことなく今に至る。有里子。中島はそんな名前だっただろうか。中学校での、部活や勉強で多忙な日々や、新しくできた友達の存在は、わたしの中の中島の記憶を薄めていった。

中島は「小学校の思い出」というタイトルで遠足や運動会のことを書いていたが、彼女がそれらの学校行事を楽しんでいたのかは分からない。彼女の作文は、妙に平仮名が沢山使われている上に、改行も多い。頭が良く、字も綺麗なのに、どうしてこんなふうに作文を書いたのか不思議に思いながらも読み進める。「おおきい」や「だいすき」などの簡単な漢字でさえ平仮名で書かれてある上に、文章も読みづらい。それでも最後まで読み、不可解な気持ちで作文を眺める。中島は、どんな気持ちでこの作文を書いたのだろう。ふと、中島と過ごした放課後の記憶が甦ってくる。放課後の教室、漢字の書き取り、メダカの水槽の匂い。メダカ……。わたしは教室で飼っていたメダカを死なせてしまい、その罪を中島に着せてしまった。

中島と一緒に宿題をしている時、彼女が教科書の文の頭の文字だけ拾ってわけの分からない言葉を作って遊んでいたことを思い出した。彼女の作文をよく見ると、改行された文章の頭文字はすべて平仮名で書かれている。

わたしは「あっ」と息を呑んで作文に顔を近づける。

「これって……」

中島の作文の文頭の、改行された行の頭文字を拾っていくと浮かんでくる文字。

〈めだかころしおおの〉

わたしはアルバムの前半の、クラスメイトひとりひとりの顔写真が載っているページを開き、〈中島有里子〉を探す。いた。色白な顔に長い髪、切れ長な目。口角をほんの少しだけ上げて控えめな笑顔で写っている。

わたしは少しの間中島の顔を見つめたあと、彼女の作文のページを破り、引っ越しの荷物を詰めた箱の中に折りたたんで入れた。

彼女は今、どこでどんなふうに生きているのだろう。

エトランゼは、情報誌と文芸誌の特色を併せ持った月刊ムック誌になります。  
メインコンテンツとして、連載ライトノベルを数作品ずつ掲載するほか、  
サブコンテンツとして、陸の孤島「文芸島」で彷徨う皆様へ、ちょっと役に立ちそうな情報をお届けしてゆく予定です。

## 《作家紹介》

Q

レストラン・グラフィティ

人間の心境、またその関係を描く作品を執筆する。純文学を志向している。

竹見名央

フィッツロビンと光の絵筆

幻想小説を得意とする。わけのわからない発想で周囲を翻弄する人物。

ひかり

水槽

心の繊細さ、移り変わりを丁寧に描く。一人称小説が得意。

## 《絵師紹介》

篠屋

えりな

不思議

表紙イラスト

不思議

## 《編集部》

松原葵

紀谷実伽留

齊藤裕之介

△ t (でるたていー)

木村千佳

あなたの気に入った作品に投票しよう！

「月刊エトランゼ」を手にとっていただきありがとうございます。  
当サークルでは、より良い雑誌作りを目指し、今後の改善、内容充実を図るため、  
読者の皆様に、作品の人気投票を行っております。  
下記リンクにアクセスしてご回答ください。ご協力よろしくお願い申し上げます。

月刊エトランゼHP

<http://kmit-monthly.weebly.com/>





5月17日の春祭、文芸棟および「ざったざた」  
で販売する、書下ろし短編集「Drole」。  
文芸学科生の小説を素敵なイラストと  
共にお届けします。価格 500 円。  
新入生割引あります！



書下ろし短編5作品掲載

新入生歓迎行事  
雑貨と本のお店「ざったざた」



日芸雑貨の総本舗「ざったざた」でも  
「Drole」を販売しております。可愛らし  
い小物と一緒に、短編小説などいかがで  
しょうか。

日時：5月17日  
場所：教室棟208  
企画団体名：ZACCa

◇新入生割引あります。是非お越しください！



とうーびー

?

こんていにゅー

KMIT では毎月、第4月曜日に小説雑誌「月刊エトランゼ」  
を刊行しています。短編から連載まで、様々なジャンルを  
網羅。一度、手に取ってみて下さいね。

# 月刊イトランゼ

ライトノベルフリーペーパー

2014.5/17 春祭号外  
2014.6/23 第6刊  
紙媒体 & 電子版で随時配信!

月刊誌公式サイトで情報配信中!  
<http://kmit-monthly.weebly.com/>

## 協力者求ム!

KMITでは、作家、編集者、絵師を常時募集しています。  
KMITの運営スタッフには、部員として活動している人も、協力スタッフとしてお手伝いをしている人もいます。  
少しでも当サークルに興味を持たれた方は、  
お気軽にHPやメールアドレス(kmit.kemmy@gmail.com)からご連絡ください。お待ちしております!

現在3タイトル人気投票中! 下記の番号で投票してね!



①フィッツロビンと  
光の絵筆



②レストラン・  
グラフィティ



③水槽



## 月刊エトランゼ 第5刊

<http://p.booklog.jp/book/85492>

著者 : kemmy

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kmit-kemmy/profile>

発行 : 日本大学芸術学部文芸学科 サークルKMIT (ケミット)

URL : <http://kmit.weebly.com/>

小説執筆 : 竹見名央/ひかり/Q

イラスト : えりな/不思議/篠屋

表紙 : 不思議

編集 : 紀谷実伽留/齊藤裕之介/△t (でるたていー) /木村千佳

発行者 : 松原葵

電子版入力 : 柚木涼

月刊エトランゼ HP

<http://kmit-monthly.weebly.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85492>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85492>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ